

2. 非鉄金属企業の日常

ー台湾／台湾日産金属股份有限公司での日常生活についてー

台湾日産金属股份有限公司 松田 篤哉

1. 台湾日産金属股份有限公司（以下、台湾日産金属）の紹介

台湾日産金属はJX金属グループの台湾にある現地法人で、拠点としては工場が2箇所、リサイクルのヤードが1箇所、営業事務所が2箇所あり、台湾にて様々な事業を展開しています。

桃園市の龍潭科学園区にある龍潭工場では、半導体用スパッタリングターゲットやUBMめっき受託事業※などの製造の機能と、それらの製品の販売に加え、圧延銅箔・化合物半導体などの販売の機能も有しています。特に半導体用スパッタリングターゲットは、最先端のロジックやメモリなどをはじめ、各種半導体デバイスの製造に用いられ、業界トップのシェアを有しています。世界的なデジタル化進展に伴って半導体産業の拡大が進み、長期的な観点で需要増が見込まれることから、龍潭工場においても半導体用スパッタリングターゲットの加工設備の増強を行っています。

桃園市観音区にある観音工場では、伸銅品・精密圧延品のスリット加工およびこれらの販売の機能を有しています。

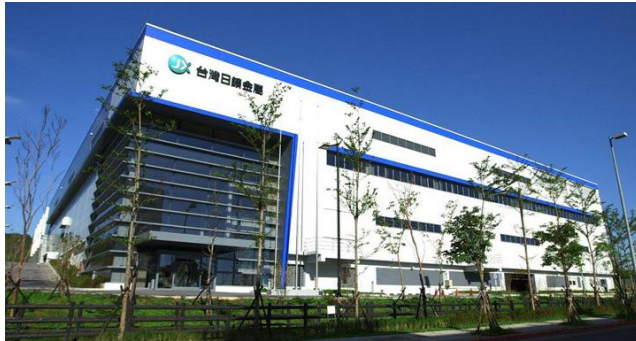
彰化縣にある彰濱リサイクルセンターでは使用済み家電製品・電子機器などのリサイクル原料の集荷や前処理を行っております。なお、回収したリサイクル原料はコンテナ船で日本へ運ばれ、JX金属製錬（株）佐賀関製錬所の製錬プロセスを経て、銅・貴金属・レアメタルへ再生されます。

ほか、台北事務所ではパンパシフィック・カッパー株式会社の委託を受けて、電気銅の販売を行っています。

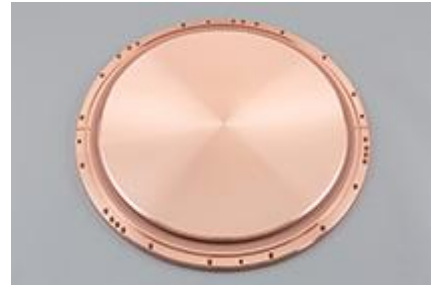
台湾は世界的に見ても半導体や電子機器分野における非常に重要な拠点であることから、台湾日産金属は顧客や市場の動向を日本へ発信・連携しながら、生産活動や営業活動を行っています。

※UBMはUnder Bump Metallurgy (Under Bump Metal、Under Barrier Metalとも)の略称で、半導体ウエハの電極にはんだ接合性を付与させるために用いられます。UBMはウエハにめっきを施すことなどにより形成されます。当社のUBM形成サービスは、無電解めっきによるウエハめっき（半導体めっき）処理が特徴であり、具体的には、ウエハ電極上に無電解ニッケル金めっき皮膜や、無電解ニッケルパラジウム金めっき皮膜を形成します。

龍潭工場



製品例：半導体用スパッタリングターゲット



観音工場



製品例：銅合金箔



彰濱リサイクルセンター



使用済み家電製品・電子機器などのリサイクル原料



2. 台湾のご紹介

台湾の面積は 36,191km² で、九州 (42,191km²) よりもやや小さいと考えていただければと思います。人口は約 2,334 万人 (2023 年 7 月現在)、うち在留邦人は 21,605 人が台湾で暮らしています。人口の 9 割以上は漢民族が占めています。ほか、原住民が 16 部族おり、新住民 (国際結婚等のために台湾籍を取得) も暮らしています。

標準語は中国語 (台湾では「国語」ともいう) で、日常では台湾語 (閩南語)、客家語、原住民の各言語も使われており、公車(バス)に乗っていると、中国語 (国語)、台湾語、客家語、英語の音声案内が流れます。中国語 (国語)、台湾語、客家語はそれぞれ全くと言っていいほど発音が異なります。

台湾は特に親日と言われております。日本の店舗も街中にあり、コンビニはセブンイレブンとファミリーマート、無印良品・ニトリ・100円ショップ、デパートは三越・高島屋・そごうもあり、モスバーガーは日本以上にあちこちに店舗があり、スシロー、くら寿司、ラーメンの一風堂などは行列を作るくらい人気があります。

東日本大震災の際には、台湾から日本に贈られた義援金の総額は政府機関や民間、合わせて 68 億 5 千万台湾元 (約 264 億円) に上り、海外からの義援金としては世界で一番多かったそうです。今年の 1 月に発生した能登半島地震においても、被災地支援を目的に開設した衛生福利部の口座に集まった寄付金の金額は、1 月 17 日までに 4 億 5076 万台湾元 (約 21 億 1400 万円) 余りに達したとの報道もあり、親日という言葉では表せられないほど日本への思いを強く感じます。

コロナ前は台湾から日本へ訪問した訪日者数は約 500 万人ということで、人口比では 4.6 人に 1 人が年に一度日本を訪問したというデータもあります。

一方で、日本からの観光客はコロナ前の 2019 年の数字ですが、年間約 200 万人で、特に小籠包やタピオカミルクティーといった小吃という台湾の B 級グルメや南国フルーツが安くおいしいという点、また、日本統治時代の古い建物がそのまま保存されているエリアもあり、懐かしさを感じられる観光地として人気があるというイメージがあるかと思います。

3. 金瓜石鉱山について

メタ研通信という金属に関する内容に寄稿させていただいていることもありますので、台湾の鉱山の歴史について記載したいと思います。

台湾は日清戦争後の 1895 年の下関条約から終戦の 1945 年まで、日本が統治していた時代があったことは皆さんご存じかと思います。

台北市の東に車で 1 時間くらい行った基隆山 (標高 587m) では 1898(明治 31)年から日本による鉱山の採掘がはじまりました。

基隆山の稜線の西側は藤田組 (現 DOWA ホールディングス) が瑞芳鉱山として、東側は田

中組（釜石製鉄所を創設）が採掘権を得て、金瓜石鉱山として鉱山開発が本格的にはじまりました。

なお、瑞芳鉱山の跡地が現在は九份という地名になり、現在は映画「千と千尋の神隠しの舞台」となったと言われている老街として有名な観光名所となっています。

一方の金瓜石鉱山ですが、1930年代は東洋最大の貴金属鉱山として、金だけでなく銅の産出量も多いことで知られるようになりました。

そして、1933年にJX金属の前身である日本鉱業が金瓜石鉱山を2,000万円で購入。1945年の終戦以降は台湾政府が国有化し、1987年まで鉱山での採掘が続けられていました。

金瓜石鉱山の跡地は、現在、黄金博物館として鉱山の一部や、金瓜石鉱山の工場長の邸宅、幹部社員の日本式宿舎、赤レンガ造りの壁などがほぼ当時のまま保存され、有料で公開されており、また、鉱山跡地から海側へ向かって少し山を下った場所には選鉱所の跡地である十三層遺址などを見学できます。

写真でご紹介したいところですが、手元に良い写真がありませんでした。黄金博物館は日本語のホームページもありますので、ご興味のある方はホームページをご覧ください。

4. 台北市の日常生活について

駐在員は彰濱リサイクルセンターの勤務者以外は台北市に賃貸マンションに住み、子どもを帯同している駐在員は日系幼稚園や日本人学校の近辺に、それ以外の駐在員は台北市の中心部で生活し、そこから各拠点へは駐在員相乗りのハイヤーで通勤しています。

台北市の緯度は沖縄の与那国島と同じくらいですが、台北市は盆地であることから、夏場の6月から9月くらいまでは非常に気温が高くなり、日差しも強いいため、日中ひなたを歩くのは非常に大変です。一方、冬は時折最低気温は10℃を下回る日もありますが、1月でも最高気温が27℃という日もあり基本的には温暖で、夏の厳しい暑さを除けば過ごしやすい気候です。しかしながら、湿度は常時高いので、カビ対策は必須で、洗濯物は天日干しではなかなか乾きにくく除湿機や乾燥機を多用しています。

台湾は沖縄とフィリピンに挟まれていることから、台風がよく通過し、上陸するとなるとその威力は強大です。台風が上陸する際には、各自治体の判断により台風休暇が発令され、登校や出勤が免除されます。昨年2023年、台北市は1回台風休暇になりました。

治安については、日本ではないという点での注意は必要ですが、危険と感じたことはありませんが、唯一変わってほしいと思う点は交通マナーです。まだ2年弱の駐在期間ですが、これまで何度となく交通事故の現場を目撃し、自分が乗っている車やタクシーが後ろの車から追突された経験も2回あります。台湾では「行人地獄」という造語があり、歩行者がいかに危険にさらされているか物語っています。昨年春に交通マナー違反の罰則が強化され、横断歩道の前で立っていると車やスクーターが止まってくれるようなことも少しずつ増えてきましたが、さらなる改善を期待しています。

余暇の過ごし方ですが、自分で車を運転するとなりますと交通事故の心配があるため自分で運転する人は限られますが、治安はよく、公共交通機関が発達していることもあり、特に制限なく余暇を楽しんでいます。駐在員はゴルフを筆頭にテニス、サッカー、マラソンなどのスポーツをしている方が多いです。私の場合は、家族帯同で台湾に来ていることもあり、連休があれば新幹線や高速バスを使って、台湾内の旅行に出かけています。運動としては、休日は1日10,000歩を目標に、家の近くの山に登ったり、近くの市場や目標を決めて散策がてら歩くようにしています。歩き疲れたら足裏マッサージも良いかもしれません。

新年 0:00 の台北 101 の花火
(ビルから花火が噴射)



阿里山のご来光と雲海



九份の阿妹茶樓
(奥の山が基隆山)



5. 普段の食事

前述の通り、私は家族と生活しているため、朝夕は日本食を食べています。ローカルのスーパーでも、ほぼ日本と同じ食材は購入できます。調味料は醤油、料理酒、味噌、みりんなどは台湾産がありますし、日本からの輸入品も気軽に手に入ります。納豆は冷凍した状態で

売っています。魚はスズキやタチウオ、サンマは入手しやすく、しばしば我が家の献立に登場します。肉は台湾の方は骨の近くの肉を好むようで、スーパーでも骨付き肉がパックで売っており、日本よりも割安で売っているように感じます。台湾で買えずに困ったものがあるとすれば、ミツバとコンソメくらいです。

台湾では自炊よりも外食中心の生活スタイルであり、日本と比べると飲食店が非常に多いと感じます。また、テイクアウト文化も定着しており、外帯（ワイタイ）と言って、割と敷居の高いレストランでも食べ残しを気軽に持ち帰りできます。特に中華料理は品数を頼むので、料理が多く余る傾向がありますが、その場合は打包（ダーバオ）といって余った料理を持ち帰りのカップや包装をしてもらうサービスが定着しています。

Uber Eats も普及しており、1回の利用料が 15NTD や 20NTD と割安で、普及率は日本よりも高いように感じます。我が家も週に 1~2 回は利用しています。

外食から少し外れるかもしれませんが、台湾ならではの意味では、ドリンクスタンドが多く、お茶やフルーツジュース、タピオカ入りなど種類が豊富でかつドリンクカップのサイズが大きいです。

台湾ならではの意味では夜市が有名ですが、夜市では食べ物だけでなく、ダーツで風船を割ったり、輪投げなどで一定の点数を獲得すると商品がもらえるというようなレトロなゲーム場のような店も多く、我が家にとって夜市は歩き食べをする場所というよりも、子どもがレトロゲームをするために出かけることが多いです。

外食という意味では、台湾は中国大陸、ベトナム料理をはじめとする東南アジアなど様々な国の料理を食べることができます。台湾らしい小籠包や台湾料理の店へは日本からの来客と一緒にいくことが多いですが、私のおすすめは北京ダック（広東式や香港式ダック含め）です。腕のある料理人が大陸からやってきていることもあり、日本よりも割安でおいしく台北市内でも人気店が複数あります。皮だけでなく、肉も食べることができ、得した気分になります。台湾に来なかったらなかなか食べられなかったと思います。

6. 食堂

龍潭工場には食堂があります。厨房は工場内にはないですが、buffet形式で、食べたい分を自分で盛り付けて食べることができます。

通常、ご飯か麺を選択し、主菜は 2 品、副菜が 3 品、スープは湯品という普通のスープと、甜湯というデザート用の 2 種類が提供されています。ご飯は白米か紫色の古代米から選択できます。

写真は 2024 年 1 月 11 日に私が食べたものです。

麺は「排骨冬粉湯」という、骨付き肉でダシを取った春雨スープとの意味です。また、その日は豪華で「肉粽」、鳥肉と卵が入ったちまきがありました。日本よりも少し油が多めな印象を受けます。

この日は暖かい珍珠奶茶（タピオカミルクティー）の提供があり、デザートとして飲みました。

ランチメニューはイントラネットに掲示されており、人気のメニューが出る日はチャイムと同時に殺到し、少し遅れると食べられないなんてこともあります。

駐在して間もない時は、台湾の文化になじむためにはまずは食事だと意気込み、いろいろ食べていたのですが、炒め物や揚げ物が多く脂質の摂取がどうしても多くなってしまったことから食べる量でコントロールするようになりました。駐在員の中には弁当を持参している方もいます。

なお、昼食後は 12:30 から 12:50 までは事務所の明かりが消え、お昼寝タイムとなります。食堂の隣には卓球台があり、プレーを楽しんでいる人もおり、台湾らしいなあと感じます。

業者の方が準備中



12:00 になると行列ができます



食堂の様子



1月11日のランチ

